

運命の人、探します！

1 これもいわゆる一つの出会い？

「あつ、ん、んあ……ああつ、んん、んあ……」

言葉忘れてしまったかのような意味をなさない音の羅列。それも息も絶え絶えでか細く、普段の声とはまったく違っていやらしい。

わたし——古池梓沙は今、男とホテルのベッドの上にいた。

何をやっているかなんて説明するまでもない。エステティックサロンでマッサージの施術中、気持ち良くて——と言ったところで、こんな濡れた声では無理がある。

それは、わたしに覆いかぶさって胸を愛撫しているこの男からも明らかだ。

すつきりとした鼻梁に、涼しげな目もと。少し甘さを残した肉厚な唇は、笑うと口角が引き上げられて、ちよつとやんちゃそうな雰囲気になる。鍛えられた細マッチョな体をした男は、間違ってもマッサージの施術者ではない。

なぜならわたし同様ほとんど裸。身に着けているのはローライズのボクサーパンツのみで、その下腹部はち切れそうなほどに膨らんでいるのだ。

「柔らかな胸だ。弾力があつて」

男は吹き、わたしの胸の膨らみを揉みしだきながら、交互に口に含む。乳首をちゅくつと吸い上げ、舌先でねぶつて転がしたと思ったら、緩く歯を立てる。

気を抜くと熱に浮かされたみたいに頭の中がぼうつとしてくる。なんとしても、意識だけはしっかり持っていようと思うのだが、だんだん怪しくなってきた。

「やあ、やん、ああんつ、んんつ、はあんつ」

「さつきから可愛い声を上げてるな。そんなに胸がイイのか？」

「ちがつ、そんな、じゃ——」

わたしは首を横に振る。

恥ずかしくてたまらなかった。乱れ、悶えて、こんなに感じてしまっている自分が信じられない。

「そろそろ、こっちもいいかな？」

「え……、ひやあつ!? ああつ!!」

その瞬間、脚の付け根に強い痺れを感じた。

胸を捏ねくり回していた男の手がわたしの下肢に伸び、ショーツの布越しに敏感な箇所に触れたのだ。

「すごいな。胸だけでこんなに下着を濡らしていたのか」

口もとを拭いながら半ば感嘆したように男が言う。

「そんな……」

わたしは男から目を逸らすと、膝を擦り合わせた。貼りつく下着の心地悪さに下肢を強張らせる。

「しきりに声を上げるから、感じている振りをしているのかと思っていたが、本当に敏感なんだな」

「——なっ！」

男の言いように思わず息が詰まった。わたしは唇を震わせながら彼の顔に視線を戻す。

すると男が、今にも舌舐めずりしそうな笑みを浮かべ、見下ろしていた。

欲情を隠そうともしない男の眼差しにドキリとする。

「まったく、こんなにもほしいと思っただ女は初めてだ」

そう言っつて、男は再びわたしに覆いかぶさると口づけてきた。

「あふつ、ああつ、んふ」

わたしはまた艶のある濡れた声を上げてしまった。

どうしてこんなことになっているのだろう。

男と出会ったのは、結婚相談所へプリマヴェーラ・リアンが主催するお見合いパーティー——婚活目的の会場だ。けれども、こんな風になるつもりはなかった。

だってわたしはその主催者側の人間なのだ。正確には社員ではなく経営者の娘。

なのに、参加者とホテルのベッドで肌を重ねてしまうなんて。

どうしてこんなことになったのか……

わたしはそれを思い返していた。

わたしは、贈答用銘菓を扱う老舗の製菓会社〈江杏堂〉に勤めるOLだ。入社後二年間製造工場勤務をし、三年目にして念願叶って本社の営業部に異動になった。それから半年経った今は、営業事務として仕事を憶えている最中だ。いずれ担当を持って営業に飛び回ることを夢見ている。

両親は祖母の代からの家業である結婚相談所〈プリマヴェーラ・リアン〉を手伝ってほしかったらしいが、今は好きにさせてもらっていた。その代わり、人員が必要なきときは臨時のスタッフとして手伝いをしていく。

〈プリマヴェーラ・リアン〉は、世話好きだった祖母がお見合いを請け負うために作った会社。景気が良かった時代は、結婚式場と提携しウェディングプランの立案までしていたが、そんな華やかな業務はもう昔のことだ。ある意味堅実さを求める昨今の風潮に合わせて、「春の絆」という社名のとおり誠意ある会費で誠実な応対を信条とし、結婚相手を紹介している。

社員は、社長と副社長である両親と、祖母の代から勤めてくれている番頭格で六十代の男性社員である東馬さん、あと数名のスタッフというとてもアットホームな会社だ。娘は使い勝手のいい人手と思われるようで、なまじいつも会社にいない分、覆面スタッフとして重宝されている。

早い話、ステルスマーケティング要員だ。パーティで人が集まらなかったときなどの「サクラ」を任されている。スタッフの目の届かないところで起きる参加者同士のトラブル等々に迅速な対応

ができるので、結構役立つと思っている。

だから実家主催のパーティに出るときは、普段のわたしとわからないように持てるスキルを駆使して印象を変え、別人を装っていた。特にメイクアップには、ちよつと自信がある。

十人並みで地味な容姿のわたしが、ひとたびメイクすると、同一人物とは思えないくらい華やかになるのだ。おそらく会社でのわたしを知る人間とすれ違っても、まず気づかれることはないだろう。さすがに声音を変える技量はないので喋るとバレてしまうけれど。

どうして普段からそういったメイクをしないのかと言うと、化粧による変化など、所詮見せかけだけの誤魔化しだと思っているからだ。

そう考えるようになったのは、学生時代につき合っていた人に「使用前、使用后」と言われ振られたことが原因だった。恋した相手のためにきれいになりたいと日夜努力をしたのに、嬉し恥ずかし初めてのお泊まりで素顔を見られた途端に終わった——という悲しい過去を持つ。

世の中そんな男だけではないのだろうけど、それでも見かけの問題だけで切り捨てられたのはショックが大きかった。あんな思いをするくらいなら最初から素顔をさらしていよう、と就職以来ナチュラルメイクで通している。

今ではクマとそばかすが隠れる程度にファンデーションを塗り、色付き薬用リップクリームをつけただけの手抜きメイクだ。セミロングの髪はひつつめて一本に縛っている。今どき中学生でももう少しなんとかするのではないかと思うレベルだった。

なにせよ、素顔のわたしを良いと言ってくれる人とでなければ恋をする気はない。

そんなわたしは金曜のこの日も、いつもどおりのいでたちでOL業に精を出していた。

退社後に、先輩同僚の及川彩実さんとパイが美味しいと評判のパーティスリーにスイーツを食べに行く約束をしている。恋人がいない者同士、寂しい週末を楽しもうと計画したものだ。そのため、定時で仕事を終わらせるように、てきぱきと仕事をこなしていた。

しかしそんなOLのお楽しみは、一本の電話で泡と消えた。

昼の休憩があと五分で終わるといふときのことだ。午後の業務にそなえてマナーモードに切り替えようと手にしたスマートフォンが着信音を奏で、画面に「母」という文字が表示された。嫌な予感しかなかった。

母からの電話は大抵、「サクラ」の依頼だ。わたしは前回出たパーティで参加者の一人にしつこく言い寄られ面倒な事態となったため、「サクラ」の仕事は少し間を置きたいと両親に宣言していた。

それなのに電話がかかってきたということは、余程の事案が発生したのかもしれない――

わたしは会話を聞かれないよう、人気がない非常階段の踊り場で通話ボタンをタップした。

「何？ 電話なんてしてきて。まさか今日のアレじゃないでしょうね」

今日の夜、全国的にも有名な高級ホテル、プリンス・レイトンでゲスト――非会員向けのお見合いパーティが企画されていることは知っていた。

予感的中し、受話口から聞こえる母――副社長の声は、口調こそ明るいが、どこか逼迫している。

しかし流されるわけにはいかない。ここはきつぱりと――

「わたし、しばらく出ないって言ったよね？」

『それはそうなんだけど。でもねえ』

母が言うには、なんでもパーティに参加するはずだった女性が、突然三人もキャンセルしてきたらしい。

こういうことは、ままあることだった。おそらく彼女たちは仲良しグループだったのだろう。

〈プリマヴェーラ・リアン〉は「結婚相談所」に敷居の高さを感じてしまう人にも気軽に参加してもらいたいと、非会員向けのパーティを企画している。

新規会員を期待して入会資料も用意しているが、それほど格式張ったパーティではない。いわゆる合コンだ。とはいえ、誰彼構わずでは運営に差し障ることもあるので、住所氏名などを事前にネットで登録してもらい、そこへ確認の案内状を送付して当日持ってきてもらっている。

もちろん急に体調を崩してしまうことはあるし、已むを得ない事情が発生することだってある。キャンセル分の料理代などはこちらの持ち出しになってしまうが、仕方がない。まだ連絡してくれるだけまだ。

だが、経費面はさておき、運営側としては、男女数に差が出るのが困る。今日のパーティは二十人ほどの規模。そのうちの女性が三人キャンセルとなると単純に考えて十人対七人。

「男と女の数違っていたから相手が見つからなかった」と、主催者にクレームをつけてくる者の中にはいるのだ。

ここで対応を間違えると、どこかのSNSに投稿され、たちまち拡散される。業務に影響が出る場合だってあり得るだろう。そうなれば弱小結婚相談所の未来がどうなるかなんて、想像するのはたやすい。

わたしはスマホを耳に当てたまま、肩を落とした。家の事情を考えると、どうしたって選択の余地はない。予定していた及川さんとのスーツを諦めるしかなかった。

不況の荒波に抗えず、実家の会社には経営不振で生じた借金があるし、わたしの下には学生の弟妹がいる。両親にはまだまだ頑張ってもらわないといけない。

そのためにも、わたしができることはやらなければ。わたし一人増えても男女数が同じになるわけではないけれど、いよいよはまりました。

「——わかった。服と化粧道具一式、用意してよね」

不機嫌さを隠さず告げると、受話口から聞こえる母の声は一段と明るくなった。

『さすが、あーちゃん！ 頼りになるわ。今日はフレンチだから食事楽しんでね。東馬さんには言っておくわ』

わたしは溜め息をつきつつ、通話ボタンをオフにした。

及川さんにキャンセルの連絡をしなければならず、気が重い。本当のことを言うわけにはいかなから、実家に急用があると言おう。

お見合いパーティをキャンセルした人たちも、もしかしてこんな事情だったのだろうか。

そんなことを考えながら、わたしはスマートフォンアプリを立ち上げるの

だった。

退社後、わたしは通りでタクシーを拾った。行き先はプリンス・レイトン。

高級ホテルに行くには地味な出勤着なので、ちよつと気後れするが仕方がない。

ホテルに着くと、足早にスタッフ控室を目指す。会場となるホールのすぐ脇の小部屋だ。

黒のスーツをジェントリーに着こなした東馬さんに出迎えられる部屋に入り、用意しておいてもらった服に着替えた。高級ホテルに相応しい、お嬢様風のボレロ付きワンピースだ。色は水色。もちろんサイズはピッタリ。当然、服に合わせてパンプスも用意されていた。

着ていた服は一纏めにして、袋に入れておく。帰りにまたここで着替えてもいいし、置いておけばいつものように自宅までスタッフの誰かが届けてくれるだろう。財布やスマートフォン、家の鍵といった最低限の身の回り品は、用意されていたハンドバッグに入れ替える。

そうしてわたしは、既に持ちこまれていた愛用のメイクボックスを前に化粧に取りかかった。

まずは下地。そばかすと肌荒れをコンシーラで隠し、しっかりと整える。次はリキッドファンデーション。照明を考えて、地肌より少し明るめの色味にした。それをベースにしてハイライトとシェードカラーを肌になじませ陰影をつけつつ、ドレスに合わせた甘い顔立ちにしていく。

目もとは特に念入りに。ブラウンピンクを基本色にしてグラデーションを作る。アイラインを引き、マスカラは目尻を厚めにした。全体の盛りすぎには注意。ほわっとチークを入れたら、リップを一度くつきり塗り、色落ちし難くなるようにパウダーで押さえてから再度塗ってグロスで仕上

げた。

髪はコテでゆるふわのウェーブをつけ、ツインコーンで纏め髪にする。わざと後れ毛を作った流行りっぽくしてみた。

靴を履き替え、鏡に全身を映して最終チェックをする。

そこにはもう、地味なOL「古池梓沙」の姿はない。

こうして盛装したわたしは、受付で参加者がつけるナンバープレートを受け取ると、会場に足を踏み入れた。

正面中央のテーブルには豪華な生花が活けられていた。それだけで、会場が華やかになる。

見回すと既に男性が半数ほど来ていた。女性はというと、わたしを入れてもまだ三人。

開始時間までには来てくれると良いなと思いつながら、わたしはまるで初めて参加するような顔で女性陣のほうに足を向ける。

今日は略式ながらフレンチのコース料理をいただいたあと、席を自由に移動できるフリータイムになる。

このフリータイムがお見合いパーティーの勝負どころだった。上手く需要と供給がマッチしてお相手が見つければ良いのだけど、中には声をかけたくてもかけられない、お一人様コースとなる人も出てくる。

だからスタッフは申しこみ時の個人データをもとに、さり気なく参加者の中から良さそうな人を引き合わせたり、代わりに声をかけたりするのだ。

わたしの役目は一人にいる人に気づいたらスタッフに知らせ、場合によっては話しかけてコミュニケーションが取りやすい雰囲気にとどめた。今日は少人数なので、そこまで頑張る必要はない気がするけれど。

でも、どういう事態になろうと、自分をアピールすることはない。ここが大事。あくまでも主役は参加するゲストで、わたしは人数合わせの「サクラ」なのだから。

そして午後七時三十分、まだ男性が一人来ていなかったが、東馬さんの仕切りで「プリマヴェーラ・リアン」のお見合いパーティーは始まった。

男女交互にテーブルに着き、飲み物が銘々注がれると、まずは軽く自己紹介。わたしは商社に勤めるOL、「春野敦子」と名乗る。もちろん本名を言うわけにはいかないので偽名だ。

ちょうどそのとき、男が一人、会場に入ってきた。

遅刻した参加者が来たのだろうと、何げなく男に目をやった瞬間、わたしは「えっ」と声を上げそうになった。だが辛うじて片頬を引き攣らせるとどめて押し黙る。心臓はバクバク、頭の中は真っ白になりかけていた。

一方、その男は、自己紹介のために立ち上がったわたしを見ると、満面の笑みを浮かべて一直線に進んでくる。

中肉中背、ぱつと見そこそこイケメンな風貌のその男は、前回出席したパーティーでわたしに絡んできた人だ。本人はアプローチのつもりだったらしいが、しきりに連絡先を訊かれそのしつこさに辟易したわたしは、イベント責任者の東馬さんから注意をもらったのだ。

その後、男は正規の手続きを取って入会し、へプリマヴェーラ・リアンへのメンバーになった。だが会社としては要注意人物としてマークしている。

わたしは、「どういうこと？」と、継る思いで東馬さんを見た。わたしの視線に気づいた東馬さんが、眉間に皺を寄せて小さく首を傾げる。何か手違いがあったのは確かだ。選りにもよってわたしがいるパーティに現れるなんて――

あれ？ 待って？ 今日のパティはゲスト向けのもの。だから相談所の会員であるこの男には、参加資格はないはずよね？ じゃあどうしてここにいるの？

「吉瀬様でよろしいでしょうか？」

東馬さんはわたしを背にして男の前に立つと、参加者名簿を見ながら話しかけた。

この男の名は「吉瀬」ではない。偽名を使いゲストの振りをして申しこんだのだろうか？ 案内状が宛先不明などで戻ってこない限り、ゲスト向けのパーティでは参加者について調べることはない。

「吉瀬は僕ですが」

そこにまた別の男の声がした。わたしを含め会場にいた者が一斉に、扉口にいたもう一人の男を見る。

東馬さんが、吉瀬と名乗った男に向き直り、同じように質問をした。

「お客様が吉瀬様……、お名前をフルネームでお伺いしてもよろしいですか？」

「ああ、吉瀬頼人だ。仕事が長引いてしまって、遅れてすまない」

すまないとはいつつも悪びれた様子はなく、優雅な足取りでテーブルまで進む男からは、どこか育ちの良さが感じられた。

わたしはその吉瀬と名乗った男から目を逸らせなくなる。

見るものを惹きつけてやまない端正な顔立ち、一目で質の良さがわかるスーツをすっきり着こなす瘦身の体躯。身長は、百七十三センチの東馬さんより若干高いので、おそろく百七十五、六センチ。年は二十代半ばから後半くらい、とあたりをつける。

「恐れ入りますが、こちらからお送りした案内状はお持ちでしょうか？」

「これかな？」

吉瀬さんが上着の内ポケットからすつとシルバーの箔押しがされた水色の封書を取り出した。それはへプリマヴェーラ・リアンがゲストに送った案内状だ。

吉瀬さんから案内状を受け取った東馬さんが頷いているので、間違いないだろう。

「確認できました。では空いているお席へどうぞ」

「こっちでいいかな？」

「はい」

東馬さんとの遣り取りが、心憎くなるほどスマートだ。

そんなイイ男がどうして婚活目的のパーティに参加することにしたのか、訊いてみたい衝動にかられた。参加理由なんて人それぞれだろうが、モチないわけがないと思うのだ。

吉瀬さんの外見は結婚相手として申し分のない優良物件、上玉だった。現に女性参加者は一気に

落ち着きをなくして色めき立ったし、男性は男性でとんでもないライバル登場と苦虫と嘔み潰したような顔をしている。

もつともこれは外見だけでの判断だ。彼がどんな性格をしているのかはわからない——と、そんなことに考えを巡らせながら、わたしは奇妙な既視感を覚えていた。

いつどこで、などまったく思い当たらないが、彼と前に会ったことがある気がするのだ。

まさか同じ会社の人？ そんなことあつてほしくないが、絶対ないとは言いきれない。

今はきちんとメイクアップしているので、ちよつとやそつとの知り合いではわたしとはわからないだろう。声だけは誤魔化しようがないが、よっぽど仕事でかかわってない限り大丈夫だ。自分で言うのも悲しいほど会社にいる普段のわたしとはギャップがあるのだから。

それに、「吉瀬頼人」という名前はまったく記憶にない。多分、気のせいだろう。

「——案内状をお持ちですか？ お持ちでないでしたら申し訳ないのですが、ご退出願えないでしょうか」

きつぱりとした東馬さんの声にわたしははつとした。

吉瀬さんに見惚れて一瞬忘れていたが、もう一人の男の問題がそのままだ。

「俺はプリマヴェーラのメンバーだぞ。案内状がなくてもどうにかするものだろう」

目を丸くするその男は、歓迎こそされても、帰れなどと言われるとは想像だにしていなかったらしい。

つまりあの人、勝手に来たつてこと？

今日のイベントの日は、プリマヴェーラ・リアンのホームページで確認できる。名前を騙つて申しこんだのかと思つたが、「押しかけた」というのが実際のところらしい。

わたしを追いかけてきたのだろうか？ いや、わたしの参加は今日の昼に決まったことだ。それに、パーティに誰が参加するかなどホームページには載せていない。知っているのは、ごく内輪のスタッフだけ。となると、どうしてここに来たのか不明だ。

考えこんでいる間にも、東馬さんが男に対応している。

「こちらからお送りした案内状が参加証なのです。それが不在場合は正規メンバーでもご遠慮していただくようお願いしています」

少々のことなら融通を利かせるが、前回もトラブルを起こしている男に応じることができない。丁寧な口調ながら毅然と断りを入れる東馬さんは、さすが祖母の代からの番頭さんだけあつて風格があつた。

昔、英国で家令として学んだことがあると聞いていたが、その経験はダテではなさそうだ。

「遠慮してくれだど？ 俺はそこに立つている春野さんに用があるだけだ！」

えっと、春野つて……？ あつ、わたしのことだ!!

鼻息も荒く言い放つた男の言葉で、全員の視線がわたしに集まつた。

「入会して、彼女に会いたいと担当者に何度も言ったが、ちつともセッティングしてくれない。だから夕方からずつとこのホテルに張りこんで、彼女が来るのを待つていたんだからな」

それつてまるで——

あまりのことに、口をあんぐりと開けて、暫し閉じるのを忘れた。もしわたしが来なかったらこの男はどうする気だったのだろうか。いや、そこはわたしが心配することではないけれど。

「春野さん。前会ったときは大人っぽかったけど、今日はすごく可愛らしいね。雰囲気もまったく違っていたから最初別人かと思ったよ。でも声でわかった。それが本来の君なんだね」

何を言ってるの、この男。これは日本語なの？

うっとり目と目を細めた男に、わたしの背中に嫌な汗が流れる。

これはちよつとまずいのではないか？

他の参加者があからさまに不審そうな表情を浮かべてこちらを見ている。自分の立場がなければ、しつこい男をぶん殴って黙らせたかった。

そんな不愉快な雰囲気の中、不意に男性の声が響く。

「遅刻してきた僕が言うのもなんだけど、実は腹がペコペコなんだ。今日はこれがあると思って昼食抜きで仕事を終わらせてきたし。そろそろ始めてもらえないだろうか。さつきから良いにおいにしてるので、もう限界だよ」

吉瀬さんだ。どこか切羽詰まっているような、それでいてのんびりとした口調が、刺々しくなりかけた場の空気を変える。

「……そうですね。では料理をお願いします」

東馬さんが近くで待機していたホテルの人に、料理を出してくれるように合図した。確かに頃合いだ。これ以上、こんな男のために、時間が削られるのは腹立たしい。

「申し訳ありません。お引き取りいただけないのでしたら、強硬手段に出させていただきます。よろしいですか？」

東馬さんが、警告するように男に迫った。東馬さんの態度に威圧感が増す。

「そ、そんなことをしていいと思ってるのか？ メ、メンバーだぞ、俺は」

東馬さんの雰囲気にも呑まれたのか、男は気色ばみつつも言葉が尻すぼみになる。

わたしはその様子を見ながら、気が滅入ってきた。どういう形にせよ、こんな男がいる結婚相談所なんて入会したいとは思わないだろう。今日のパーティで新規メンバーは望めないということだ。

母の要請とはいえ、自分がここにいたから引き起こされた事態だ——家のために頑張りたいのに、逆に足を引っ掛けてしまい、申し訳なく思う。

「——僕は初めてだからよくわからないんだけど、こういうのってまず両者の合意があつてされるものだよな？」

横から口を挟んですまないと言いつつ、吉瀬さんが東馬さんに訊いてきた。

「さようでございます。どんなにお望みになられましても相手様があることです。直接お会いいただくのは、双方合意された場合のみに限らせていただいています」

東馬さんは突然話しかけられたにもかかわらず、背筋をピンと伸ばし、吉瀬さんの質問に紳士然と答えた。

「おい待てよ!! お前、何訊いてんだよ!？」

男の矛先が吉瀬さんに向かう。でも吉瀬さんはそれを気に留めもせず、東馬さんの言うことに頷いていた。

どういう意図があつてなのかわからないが、ナイスタイミングで話に割りこんだ吉瀬という男に、好感度が一気に上昇する。

そう思ったのはわたしだけではないうで、ドン引きしていた他の女性陣も表情を緩め、吉瀬さんを熱い目で見詰めていた。

「では、お引き取り願えますか」

「ちよっ!! 俺はただ、春野さんに……。そ、そうだ、連絡先! メアドでも電話番号でもいいから……」

ずいっと東馬さんに前に出られ、男の声は上ずっていた。勝負ありだ。

「よろしいですか。今後もし春野様につき纏うようなことがあれば、当社としてはそれなりの対応をさせていただきます」

これで、とどめ。

頑として譲らない東馬さんの態度は、まるで言い寄られて迷惑している女性を守っているように見えるらしい。女性参加者は吉瀬さんだけでなく、東馬さんにもうっとりとした眼差しを送っている。

これはもしかしてヒョウタンからコマ?

会社の危機かもと、内心かなり焦っていたけど、この反応は悪くない。

「わ、わかつたつて。そんなおつかない顔して睨むなよ」

顔を引き攣らせ、渋々といった体で男が踵を返し、扉口に向かう。そしてお約束のように振り返ると、忌々しげに「憶えてろよ」と捨てゼリフを残して出ていった。

どこからか、ほうつと吐き出された息が聞こえる。ひとまず一段落か。

「春野様」

「はい」

不意に東馬さんに名を呼ばれたわたしは、ぱちくりと瞬きをして、彼の顔を見る。

「ご不快な思いをさせて申し訳ありませんでした。このことは当社の責任であり、春野様にはなんの落ち度もございません。今後もし何かありましたら、すぐに連絡をいただければと思います」

東馬さんはそう言って深々と頭を下げる。アシスタントについていた若いスタッフも同様だ。もちろんわたしは、そのスタッフとも顔見知りなんだけど……

「いえ、そんな……。びっくりしましたけど大丈夫ですから」

わたしは今、「ゲスト」としてここにいるのだ。だから東馬さんは会社の代表として「不快な思いをしたはずのゲスト」に誠意をこめて謝罪したのだろう。

「ではしばらくお食事をお楽しみください」

今度はなりゆきを見守っていた他の参加者に向けて、東馬さんが頭を下げる。

そうして食事が始まった。だけど、一度悪くなつてしまった空気を完全に元どおりにすることはできず、ぎこちなさが残っている。

「良かったですね、大ごとにならなくて」

そんな中、吉瀬さんに話しかけられた。わたしと彼の間にはもう一人参加者の男性がいるのだけど、お構いなしだ。そんな彼のマイペースぶりについて苦笑したくなる。

「はい。ええ、まあ……」

「どうしてまたこんなことになったのか、教えてもらえませんか？」

口を開いたのは、向かいに座っている女性参加者だ。

誰もがわたしに詳細を訊きたがっていることは、周囲の視線から察せられた。

「あの……、それはちよつと……」

わたしは言葉を濁し、東馬さんを窺う。

あの男の態度は褒められたものではないが、一応〈プリマヴェーラ・リアン〉の正規会員であるし、本人がいらないところで話題にするのは良い感じはしない。あの思いこみがすぎるところがなければ、案外悪い人ではないかもしれない。

「お見苦しいところをお見せしてしまいました、当社に登録されている方ですので、これ以上のお話をご容赦ください」

すかさず東馬さんが間に入ってくれて助かった。

「えー、でもまああいう人を紹介されるのは困るし、ヤバい人は知っておきたいんですけど」

女性参加者が食い下がる。まあこれも正論だ。

「ご入会いただき、お相手を紹介する段になりましたら、その都度ご希望をいただくことになりま

す。希望されていない方をこちらから取り持つことは決して致しませんので、ご安心ください。どのような場合でも、優先されるのはご本人様のお気持ちでございます」

「つまり、こちらの春野さんは断った。でも向こうは何か勘違いして、ここに来ちゃったってことかな？」

今度は、はず向かいの男性参加者が質問する。

ええ、そうです。そのとおりなんですよ、と声に出して言いたいところをわたしはぎこちない笑みで答えた。

「……こちらの配慮が至らず、申し訳ありませんでした」

顔を僅かに曇らせたのを目ざとく東馬さんに見られてしまったようだ。また謝らせてしまった。

わたしは、「仕事増やしてごめんなさい」と、内心でひたすら東馬さんに手を合わせる。

もう、ほとぼりが冷めるまで——いや冷めてもパーティに出ないことにしよう。元々サクラなんて面倒なだけだし、他にもやりようがあるだろう。わたしは改めて決意した。

「でも！ カッコ良かったです！ すつと間に立って、なんだか暴漢から女性を守るSPみたいで!!」

突然上がった声に、自然に視線が集まる。奥の席の女性——先ほど東馬さんに見惚れていた人だった。キラキラと夢見るような表情を浮かべている。

「そうやって注目してもらえらなら、僕ももう少し頑張れば良かったな。お腹が空いたなんて言っていないで」

今度は吉瀬さんが言う。タイミングよく話を展開させ、彼は空気清浄機のように場の雰囲気を変  
える。

本気が嘘かわからない残念そうな吉瀬さんの言い方がおかしくて、わたしを始め何人かがクスリ  
と笑みを漏らした。

わたしは、感心せざるを得なかった。ずいぶん巧みな話術だ。彼はいったいどんな仕事をしてい  
る人なのだろう。

しかし笑うなんて失礼なことをしてしまったと、わたしは慌てて言い繕う。

「すみません。ちょっと気が緩んでしまつて。吉瀬さんを笑つたわけでは……、あの……」

「いや、ぜんぜん？ そうだな。気になるなら、このあと軽く飲みにつき合ってもらえれば——」

「はあ……、でもそれは」

みんながいる前で堂々と誘ってくるなんて。△プリマヴェーラ・リアン△の規約を知っているわ  
たしは面食らつた。案内状に、主催を通さない誘いは禁止と明記されているはずなのだ。

「吉瀬様、パーティ後のそのような申し出は、すべて当社を通していただきたいと存じます」

東馬さんが少し困つたように口を開く。

「勝手に誘つちゃ駄目？」

「はい。大変失礼ではございますが、何ごとも万が一のことがございます。当社主催のパーティで  
出会われた方と次にお会いになりたい場合は、私どもにお知らせください。改めて後日こちらから  
ご連絡をし、場を設けさせていただきます」

メンバー登録がされていないゲストに勝手に振る舞われては、何か起きたときに対応が難しくな  
る。会社としてできるだけトラブルを避けるための規約だ。

「そうかあ。結婚相手を探して参加してるわけだから、合コンのノリで声かけたらいけないんだな。  
春野さん、軽く誘つてすまない」

少し大げさに頭を下げた吉瀬さんだったが、にこりと笑みを浮かべた顔に悪びれる様子はない。

普通そんな態度を取られたら、調子がイイだけのヤツと鼻白むところだが、吉瀬さんにはなんと  
いうか、かえってそこに親しみやすさがあった。もし、わたしにもお相手を探す権利があったなら、  
吉瀬さんの名を最初に挙げるだろう。

とは言つても、わたしに男を見る目がないのはこれまでの経験で思い知っている。特にこうして  
メイクアップしているときに近寄ってくる男はすべて警戒するに越したことはないのだ。

パーティ終了後、開始前に受付で渡されたナンバープレートの裏面に、気になる人の番号を書き  
こみ、返却する。なければ、番号なしで返せばいい。——わたしのプレートのように。

これでマッチングしていたら、改めて一対一でのお見合いが双方に打診される。それが△プリマ  
ヴェーラ・リアン△のアフターサービスだ。だからチャンスは今、この場だけ。

トラブルはあつたが、一応それなりに事が運んだパーティを終えて、参加者が帰途に就く。用意  
した入会案内のパンフレットを持ち帰る人もいれば、さっさと出ていく人もいた。

「今日はありがとうございました」

わたしも、扉口で見送ってくれるスタッフにそう挨拶すると、ひとまず会場をあとにする。

この格好のまま帰宅しても構わないのだが、参加者の姿がなくなったところを見計らい、スタッフ控室に戻って着替えをしようと考えていた。「春野敦子」から「古池梓沙」に戻るのだ。

どこで他の人をやり過ごそうかと考えながらエレベーターホール前まで行くと、そこにはまだ参加者の半数近くが残っていた。エレベーターのボタンは押されていたが、それを待っている風でもない。

「春野さん」

呼ばれた以上返事をしなければ。わたしは「はい」と、顔を向けた。

そこにはしきりに吉瀬さんに秋波を送っていた女性陣が揃っていた。その後ろには男性が三人ほど。

「あのね、パーティの規約はわかっているんだけどね」

意味深に口もとを緩ませている彼女たちに促され視線をやると、向こうに吉瀬さんの姿があった。こちらに背を向け電話をしている。

どうやら、彼を誘って二次会に行かないかということらしい。

主催の与り知らないところでの遣り取りはNGといっても、会場を出てしまえば目の届きようがなく、それこそ勝手に次へ流れていく。

しかしわたしは、話に乗る気はなかった。規約のこともあるし、サクラとしての都合上ゲスト参加者とはパーティ会場だけのつき合いにしている。

もし何かの弾みで身上調査されたら面倒この上ない。身バレしようものなら、〈プリマヴェーラ・リアン〉は社会的信用を失い、すべてが終わってしまうのではないか。

「ねえ、二次会どうかしら？ 彼も誘ってちよつと行かない？」

「すみません。わたしはもうここで失礼させていただこうかと。門限が十時なんです。今出ないとぎりぎりです」

これまでの経験から、そう言うで大抵の人が引き下がってくれることを知っていた。

「十時に門限って!? あなたいったい、いくつなの？」

時間は九時半に差しかかろうかというところ。彼女らは一様に「はあ？」と、信じられないものを見たと言わんばかりにのけ反る。

ちなみに十時にしたのは、その時間に観たいドラマがあるからだだった。今日は及川さんとスイーツを食べたらずぐ帰るつもりで家を出たので、録画予約をしていない。

「なんだ、そういうことなら——」

突然、わたしは後ろから伸びてきた腕に、肩を抱かれた。

「はい？ え？ あ、あの」

何事？ まさかこの声って——？

信じられない思いで見上げると、端正な横顔が目に入る。

やっぱり吉瀬さん!?

驚いたのはわたしだけでなく、吉瀬さんに声をかけようとしていた彼女たちもだ。

「あの！ 吉瀬さん、今から——」

「悪いね。僕は彼女を送って帰るよ。パーティ後の遣り取りは駄目だってプリマの執事さんが言っていたからね」

プリマの執事さんって東馬さんのこと？

確かに、言い得て妙だ。祖母にずっと仕えてきた東馬さんは、それこそ我が家の執事だった。

「でも、せっかくの機会ですし」

「またね」

女性たちの一人が引き留めようとするけれど、吉瀬さんはにべもない。

そして、タイミング良くドアが開いたエレベーターに乗りこんでしまう。もちろん肩を抱かれて  
いるわたしも一緒だ。

ドアが閉まる瞬間、こちらに向けられた視線がとんでもなく怖かったが、見なかったことにした。

「離してください」

エレベーターは吉瀬さんとわたしの二人だけだ。

「ああ、ごめんごめん。けどそんなに警戒してほしくないなあ」

言いながら腕を離してくれたが、相変わらず吉瀬さんには、まったく悪びれた様子がない。  
人を半ば強引に帰る理由にしておきながら、警戒するなはないだろう。

「僕としては助けたつもりなんだけど？」

「助けた？」

わたしはあからさまに目を眇め、横に立つ男を見上げる。

二次会に誘われて困っていたと思ったのだろうか。

「乱入してきた男、いただろ？」

「え？」

そう言われてわたしはドキリとする。

「あの男、追い出されても君を諦めてなかったみたいなんだよね」

「どういうことですか？」

わたしの胸は嫌な感じに締めつけられ、鼓動を速める。

「気づかなかった？ エレベーターの横に階段あったら？ そこにいたんだよ。パーティが終わ  
るのずっと待ってたんだらうね」

「嘘……」

そんなこと、ちっとも気づかなかったけど。

わたしは、さーっと顔から血の気が引いていくのを感じた。もしそうなら、また絡まれるところ  
だった。ましてや家までつけられでもしたら……

「すごいね、あそこまでするって。よっぽど君のことが気に入ってるんだな」

「そんな」

わたしは眩暈を覚える。

そうだ、化粧を落として元の姿に戻ろう。そうしたらあの男だって気づかないはずだ。

しかし、私服は会場の横のスタッフ控室。そこに行く途中で男に見つからないとは限らないし、見咎められて素のわたしの姿を知られたら、公私ともにつき纏われることに——いや、反対に興味

が失せるかもしれない。あの男は化粧しているわたしに執着しているようだから。ただ、そうなったら、わたしの正体がバレてしまう。スタッフ控室で着替えをするなんて、一般参加者では考えられないことだ。

「おい、大丈夫か？ 顔真つ青だぞ？」

「だ、大丈夫……です……」

そうだ。東馬さんに連絡して迎えに来てもらおう。みんなの前で言ってくれたではないか。何かあつたらすぐに連絡を、つて。こういう事態なら東馬さんを頼つても問題はないはずだ。

そんなことを考えているうちに、エレベーターは一階のロビーに着いた。わたしは吉瀬さんに寄り添われて、エレベーターを降りる。

「あつ」

「え？」

わたしはいきなり吉瀬さんに抱きこまれた。背中に壁が当たり、広い胸がわたしを隠すように立ちはだかる。

「階段で追いかけてきたみたいだ」

「ひっ」

わたしは恐怖で、吉瀬さんにしがみつく。

誰か、嘘だと言つて……

喉から飛び出しそうになる悲鳴をぐつとこらえる。下手に声を上げて、目立ってしまうのはまずい。

「このまま出ていっただら見つかるな。どうする？ パーティでのこともあるし、やっぱり警察かな」

「す、すみません、警察は……」

警察に連絡するのは大ごとすぎる。何より公になつて困るのは、こちらもだ。

親切で言ってくれた吉瀬さんに申し訳なくて、わたしは顔を伏せた。

これまでもパーティに出て、参加していた人に言い寄られた経験はあるけど、ここまでされたことはさすがになかった。

バチが当たったのだ。もうサクラなんて絶対しない。誰がなんと言おうと、もうもう絶対——

「——わかった。少しやり過ぎそうか。君が出てこないとなれば、諦めるかもしれないし」

わたしの態度から、吉瀬さんは何か察したようだ。そう提案してくれる。

「とはいえ、ここにいつまでも立っているわけにはいかないし、どこかで時間を潰そうか。他のパーティ参加者が来たら面倒だし……。ああ、そうだ。地下のカクテルバーへ行こう。こここのロビーラウンジじゃ隠れようがないからね」

確かに、すぐ近くにあるロビーラウンジは壁がなく、外から誰がいるか丸見えだった。このホテルのカクテルバーを利用したことはないが、きつとそういう心配はないのだろう。

「こっちだよ」

吉瀬さんが慣れた風にわたしの背中に手を回す。

こうして歩くわたしたちは、知らない人たちからすると、きつと週末の夜を楽しむカップルに見えないに違いない。

地下にあるバーでは出迎えた店の人に、吉瀬さんがあの男の風体を伝えて、中に入れないようにしてくれと話をした。高級ホテルのスタッフは、こういったことにも応じてくれるらしい。

奥まった席に案内されると、吉瀬さんはホテルのオリジナルだというカクテルをオーダーした。

「大丈夫かい？ そろそろ十時だけど、門限はいいの？」

「あ、そ、そうですね。門限はあの場を断るための嘘だったので、いいんですけど……。あの、すみません。こんな面倒に巻きこんでしまつて」

東馬さんに連絡をと思うのだが、わたしは男から逃れてここに来た安堵から、いろんな気力が萎えていた。ちらりとドラマのことが横切ったが、それもどうでもよくなっている。

「門限は君のような女の子ならいい理由になるな。……気にしなくていいよ。そのまま知らん顔するのは寝覚めが悪いからね」

目を細めて笑う吉瀬さんに、わたしはつい見惚れた。

小さなグラスに注がれたカクテルが運ばれてくると、「こんなときに乾杯はないけど」と言つて、吉瀬さんはグラスを掲げてから口をつける。わたしも彼の目を見ながらグラスを手にとつた。

「あ、これ美味しい」

フルーティで口当たりが良く、軽めの炭酸が喉をすつきり通つていく。あの男に絡まれるかもしれないという恐怖で喉が渴いていたわたしはつい一気に飲み干してしまつた。

「口に合つたようだね。……同じものを」

吉瀬さんはすつと手を上げ、ウェイターに合図する。

本当に彼はどういった人なのだろう。

一杯目のカクテルを頼んだときの慣れた様子から、何度かこの店を利用してはいる気がした。思返すと、お店の人と話していたときも落ち着いていて、初めてという感じはしなかった。

それを確かめたいと思い、わたしは口を開く。ちよつとした話のきっかけのつもりだ。

「あの……、もしかして吉瀬さんは……」

「悪い。ここで名前を出さないでくれるかな？ このホテル、仕事で利用していて、たまに知り合いが来てたりするんだ。さっきのパーティのような関係者以外入つてこない会場ならいいけど、週末だし誰かに会つたら、ちよつとね」

「そういうことでしたら、わたしと一緒にいるのはまずいんじゃないですか？」

「だから人目につき難い席にしてもらつたんだ」

そう言つて、いたずらっぽく吉瀬さんは片目を瞑る。

慣れているように感じたのは、仕事で利用していたからだとわかつた。

人にはそれぞれ何かしらの事情があるものだ。踏みこんではいけないラインは弁えておかなければ、とわたしは詮索しないことにする。

「わかりました。……でしたら、なんとお呼びすればいいですか？」  
しかし名なしでは呼び方に困ると思い、訊いてみる。名字が駄目なら、当然下の名前も駄目だろう。

「名前さえ言わないでくれたらなんでも。『おい』でも、『お前』でも」  
「えっ、それは……」

いくらなんでも、「おい」とか「お前」はないでしょう。

わたしは困惑気味に吉瀬さんを窺った。彼はにこりと微笑む。

そこで、まだちゃんと礼を言っていなかったことに気づき、慌てて口を開いた。

「あの、きつ、あ、いえ、——さつきは、ありがとうございました。いろいろ助けていただいて」  
名前を呼んではいけないんだった、と口ごもりながら感謝の気持ちを伝えた。吉瀬さんの機転がなかったら、どうなっていたことやら。

「いやいや、役に立てて良かったよ。それで、今からなんだけど」

顔を覗きこむようにして言われ、ドキツとする。

図らずもムードたつぷりに照明を絞った店の雰囲気。その上、つい呷ってしまったカクテルでわたしはほんのり酔い出していた。それなのに吉瀬さんは、わたしが飲み干すたびに次のカクテルを注文してしまう。

まずい。理性が溶けかけている。

こういうときほど気を引き締めなければ。

わたしは、すっかりしると自分に言い聞かせる。

「あの、ここで少し時間を潰したら、タクシー呼んで帰ります」

これ以上、吉瀬さんに迷惑をかけるわけにはいかない。ましてや酔っ払って醜態をさらすようなことになっては……

「僕は——いや俺は、今夜は君と過ごしたいと思っただけだな」

「は？」

何？ いきなり何、言われたの？

自分のことを「僕」から「俺」と言い直した吉瀬さんは、とんでもない爆弾発言を投下した。

わたしと今夜を過ごすって、どういう意味!?

わたしはあんぐりと口を開けたまま、瞬きを数回、いや数十回した。

つまりそれって、大人の男と女、性的な意味で、ってこと？

そう思い至った途端、動揺する。それを意志の力で抑え、わたしはなんとか冷静を装った。

清純ぶる気はないし、そういった誘いは初めてではないけれど、ここで言うことではないだろう。こっちは気のない男に押しかけられ、さらには待ち伏せされて気分が悪いのに。

いや違う。わたしは今、吉瀬さんに裏切られた気がしてムカついたのだ。

結局、男とはそういうものなのか。助けてくれて良い人だと思ったのに、そういう機会を狙っていたなんて。

「君さ、結構感情が顔に出るよね。今は、『何言っただこいつ』かなっ」

わたしの心の中を読んだように言う吉瀬さんは、変わらず笑みを浮かべていて、その表情にも態度にも悪びれた様子がない。

まったく、男ってどういつもこいつも……

「わかっていらっしやるなら、話が早いです。一応うかがいますが、どうしてそうなるんですか？」  
わたしはすつと背筋を伸ばし、カクテルを呷ると毅然と問い返した。

「君に一目惚れしたといったら信じるかな？ 遅れて行ったあのとき、思いきり怯えた顔した君が立っていたんだ。それを見た瞬間、俺は恋に堕ちた」

「え？ は？ 一目惚れって……？ あのとき？」

頭の中に疑問符を飛び交わせながら、わたしは言われたことを脳内で反芻する。

入ってきた男を見てびっくりしたし、まじいとも思ってたけど、怯えていたなんて――

もしかしたら、無意識にそんな顔をしてしまったのかもしれない。本当に驚いたし、正直言えば、怖かったのは事実だ。

「だから俺は、守ってあげたいと思った」

「そんな……。からかわないでください」

先ほどのムカつきはどこへ行ったのか、トクントクンと鼓動が加速を始める。

さらに端正な顔をすいっと近づけられて、わたしは息を呑んだ。

どんなに素顔の自分を認めてくれる人でなければ恋をしないと信じていても、ときめきは止まらない。

元々、吉瀬さんのことをちよつと良いかとも思っていたのだ。

だからこんなことを言われたら、ほわりほわりと心が揺れ出してしまう。

「からかってなんかないよ。あの番号を書くプレートに君の番号を書いたから、本当は連絡が来るのを待ってればいいんだらうけど」

「え……」

わたしは顔を僅かに引き攣らせた。ナンバープレートには、誰の番号も書かずに返却している。

「その顔……、君は、俺の番号を書いてくれなかったのか？」

わたしはさらに目もとを強張らせ、吉瀬さんの眼差しから逃れるように顔を伏せる。

「君の番号しか書かなかった俺には、このまま待っていても、プリマの執事さんからの連絡は来ないということか……」

確かに、そういうことになる。

それにしても、本当に、わたしの番号を書いてくれたというの？

「話してて、君も満更じゃなさそうだった。だからてっきり俺の番号を書いてくれたと思っていたよ。でも連絡をただ待っているのがもどかしくて」

わたしだつてサクラという立場でなければ、吉瀬さんの番号を書いただろう。

吉瀬さんの声はどこか気落ちしているように聞こえ、わたしは申し訳なさいで一杯になった。

今彼はどういう顔をしているのだろう。俯いているわたしにはわからないけれど……

わたしは、吉瀬さんの様子が気になり、おずおずと顔を上げた。

吉瀬さんは、それを待っていたかのようにわたしを見ると、ニヤリとどこか人の悪そうな笑みを浮かべた。

「声音と表情が違うでしょ、それ!？」

わたしは思わず目を睜る。けれど気づいてしまった。表情こそ笑っていても、吉瀬さんの目は、ゾクリとするほど真剣だ。

「俺は本気だ。良かったよ、声をかけられて。こういうパーティーは初めてだし、実を言うともあまり期待してなかった。でも君がいた。本気で、君がほしいと思ってる」

吉瀬さんの、まるで獲物を前にした肉食獣のような表情。それを見て、わたしの脳内に最大出力のアラートが鳴り響く。

「ヤバい。マズい。このままでは――」

それなのにどうしたことか、身の危険を感じながらも、わたしは魅入られたように吉瀬さんから目が逸らせなかった。

サクラだったという後ろめたさがそうさせるのだろうか。

気になっていたら人にほしいと言われて、それこそ乙女のようにときめいてしまったのだろうか。正直なところ、自分でもよくわからなくなっていた。

吉瀬さんは、肩を抱いてわたしを引き寄せると、お腹の奥をきゅんと痺れさせる声で囁く。

「部屋を取っている」

「そ、そ、そんなことを言われても……」

蕩けだした理性で辛うじて抵抗しようとするも、わたしはか細い声を上げるのがやっとだ。

それでもどうにか、肩に回された吉瀬さんの腕を払いのけて立ち上がる。いや、立ち上がるうとした。

「あれ……?」

しかし腰を浮かせた途端、膝からスコンと力が抜けてしまい、わたしは再びソファに身を沈める。

「急に立つんじゃない。酔っ払いが」

「よ、よ、酔っ払って、なんて」

慌てたわたしは、声が裏返ってしまう。

「それだけ飲んでおいてよく言うな」

「それだけって言われても……」

飲み干すたびにグラスは下げられてしまうので、何杯飲んだのか定かではない。わたしは気まずげに視線を泳がす。

「無防備なんだよな、君って。考えていることが顔に出るのもそうだけど」

「し、知りませんっ」

吉瀬さんは手を上げ、ウェイターに水を持ってこさせる。そして――

席が奥なのを良いことに!

ソファの背もたれが高く、通路から目隠しになるのを良いことに!

グラスの水を口に含んだ吉瀬さんは、なんとわたしに口づけて飲ませたのだ。

「だから、俺に任せなさい」

喉に流しこまれた水は、飲んでいたカクテルよりもずっと甘やかだった――

\*\*\*

「あ、ああん、もう……いやあ……」

結局わたしは、男に乞われるままにホテルの部屋へについていつてしまった。

ショーツを脱がされ、すぐに昂った自身を入れられるのかと思っていたが、吉瀬さんは執拗だった。乳首から下肢に移った手は恥毛をかき分け、隠れていた秘芯を探りだして、愛撫を始める。

女にとつて敏感なそこを、彼は指の腹で乳首を弄っていたときのように、撫で擦って捏ねた。

「弄れば弄るほど、どんどん濡れてくる。お前、感じやすいんだな」

いつの間にか、「お前」と呼ばれていた。でも今のわたしには呼び方なんて気にする余裕はない。

「そ、んな、知らな……、ああ……、んんっ！」

言っているそばからわたしは喘ぐ。

「ここ、どうなっているか教えてやろうか？ 熟したイチゴみたいに赤くなってる」

「なっ……!? このっ……変態っ!!」

つい想像したわたしは、恥ずかしくて顔を両手で覆った。まったくどういう例えをするのか、こんなことを言われたら、もうイチゴが食べられなくなりそうだ。

「ひゃあっ!?」

わたしはいきなり脚の付け根をねつとりと柔らかいもので包まれ、これまでにない声を上げた。

「な……、何、を——っ!?」

顔を覆った手を外して下腹部に目をやれば、そこに吉瀬さんの頭があった。

「あんまり可愛いからさ、ここ」

「やめっ、そ、そんな、とこっ、きたっ、な……、ああっ、な、舐めないで……っ」

あまりの衝撃で、わたしは頭の中が真っ白になる。口でされるなんて初めてだ。指で弄られるのだから、下着を濡らしてしまうほどの経験はなかった。

「やあ、んあっ、んんっ」

指で摘まれたあと、飴玉を転がすようにねふられて吸い上げられる。

彼は舌先を窄め、蜜にまみれた秘芯を突いたかと思えば、すぐにねつとりと舐め上げる。

わたしはたまらず、あられもない声を上げ、何度も腰を浮かせては沈んだ。

「ますますふっくりしてきた」

「やあん、息が……」

口をつけたまま喋るから、吐息がかかってそれだけで感じてしまう。

やさしく触られるのは気持ちが良い。でも度を越して刺激が強くなると、愉悦を味わうどころではなくなってしまう。もう限界だった。

「おね、がっ、やめ、んんっ、あ、も、もう……それ以上、弄らないで……」

わたしは息を乱しながら、やめてほしいと懇願する。

これ以上は耐えられそうもなかった。このまま続けたら、自分がどうにかなってしまいそうで怖い。

吉瀬さんが体を起こした。一瞬願いを聞き入れてくれたのかと思ったが、これで終わるわけがないことは、わたしだつてわかっていた。

彼は、ベッドのサイドテーブルに置いてあった小さなパッケージを手に取ると、ボクサーパンツを脱いで天を衝いている自身の昂りに避妊具をかぶせる。

そうして準備を整えると、わたしの脚を左右に大きく割って腰を抱えた。

わたしは目を閉じる。しかし、来るはずの衝撃は一向に来ない。

「えっ……？」

わたしは蜜口をまさぐられるのを感じて、そつと目を開けた。

「こんなに濡れてたら、大丈夫かと思うが、一応念のためな」

溢れる蜜で濡れてぬるぬるになつていても、いきなり突き入れては負担になるだろうと思つてくれたらしい。肉裂の奥に沈めた指を抜き差しし、押し広げるように動いて膣壁を擦る。

彼が見せた些細な気遣いが、変にわたしを戸惑わせていた。一目惚れしただの守つてあげたいだのと甘い言葉を並べても、所詮は抱き合うための口八丁と心のどこかで疑つていたから。

おそらく吉瀬さんは本質的にやさしいのだ。困っている人を見過ごせない、そんな思いやりを持つっている。

ストーカーまがいの男に絡まれたわたしを、機転を利かせて助けてくれた。そんな面倒なことになつている女など、巻きこまれるのはご免とスルーしても良かったのだ。

もし、吉瀬さんが本気でわたしとの交際を望んでいたら——  
わたしはすべてを正直に話せるだろうか。

「どうした？ 指じゃ物足りないのか？」

僅かに曇らせたわたしの表情から、彼は何か感じ取つたらしい。

さつきまでさんざん喘いで乱れていたのに、急に甲高い声を上げなくなったから、そう思ったのかもしれない。

本当のことを答えようがないわたしは、吉瀬さんを見詰めたあと黙つて首を横に振る。

そんな態度をどう思ったのか、彼はわたしの顔を覗きこんだあと囁くように告げた。

「まだもうちょつと我慢な。ぬるぬるだけど、お前の中、結構きついいから」

言われるのとほぼ同時に、彼の指を呑みこんでいる膣口がさらに引き攣れるのを感じた。指が増やされたのだろう。

彼の指は中できくくと動いて、かなり深いところまで掘り進めてくる。でも、乳首や秘芯を弄られていたときほど強い快感はない。

それが——

「はうっ!? やっ、ああんっ!!」

腹側の膣壁を強く擦られたとき、何か言いようのない感覚が刺激され、わたしの体が跳ねた。

「え？ な、何？ あ、ああっ!!」

何をされたのか理解できないまま、わたしは身に起きた変化におののいていた。

指で擦られたところが炎症を起こしたようにじんじんと痺れ、それが下肢に広がっていく。

「や、やめ……、い、いや……あつ!! へ、へん……な、のつ、くる……!!」

「変なのってお前……。これが何かわからないのか？」

「そんなの、わかんなっ——!!」

言いながらもなおそこを指で押し擦る彼に、わたしは半泣きになって首を横に振った。

わかるわけがない。いったいなんなのだ、これは。

女の体には、奥に感じるところがあることは聞いていたが、ここがそうなのだろうか？

「……仕方ないな。指が三本呑みこめたから、慣らすのもういいか」

吉瀬さんはどこか未練を残すように体を起こすと、ぬるっと指を抜いた。

膣口の引き攣れる感覚がなくなったわたしは、ほうつと息を吐く。あの変な感覚も不思議なことに落ち着いた。

「一息ついてるようだが、入れるぞ？ 俺もそろそろ限界だし」

「……ん」

今度こそ来るのだと、わたしは先ほどの余韻がまだ残っているのを感じながら、小さく頷いた。

「つらかったら言ってくれ。善処はする」

吉瀬さんがわたしの腰を抱えて浮かせると、秘裂にぬぷりと昂りの尖端を宛がった。そのまま

ぐつと押しこむようにして、わたしの中に沈めていく。

「ああ……」

指よりもずつと質量のあるものが、周囲の肉を押し広げながらゆつくりと入ってくる。膣口がぎりぎりまで広がって、引き攣れ感も半端ない。

「んっ。……やっぱり、きつい、な。中がきゅうきゅう吸いついてくる。少し、緩められないか？」

彼は苦しいのか片頬を歪め、途切れがちに言う。

「そんな……、ああ……」

中を緩める方法なんてあるのだろうか。少なくともわたしは知らない。そんなことを言うなら、この硬く張り詰めたものをどうにかしてほしい。

「あ、あ……、ああ……、あっ、あっ、あ」

しかし言い返す余裕があるはずがなく、開かれていく感覚に震えながらわたしは喘ぐしかなかった。

吉瀬さんはときおり小刻みに腰を動かし、自身の昂りを揺らしつつ、ぐい、ぐい、と押しこむ。

指が届くことのなかった深いところまで屹立の尖端ですんと穿たれ、わたしは衝撃で息が詰まった。

「動くぞ」

「やっ……ま、待つて……」

まだ少し、体が馴染むまでの猶予がほしかった。

ようやく収められた男のものは、圧倒的な存在感でわたしの内部を押し広げ、昂る熱でチリチリと周囲を焼いている。

こんな状態で動かれたら、どんな僅かな刺激でも悲鳴を上げてしまいそうだ。

「悪いが、待てない」

「で、でも、つ、つらかったら……い、言っ、つて……あぁ……」

彼が、さらに腰をねじこんだ。おかげでわたしの体はシーツを滑つてずり上がる。

「できないこともある」

「なっ!? はぁぁ……、んぁ、……あぁ、あぁっ……あ……」

抗議をしようとしたものの、吉瀬さんに腰を揺らされ、口から出るのはいやらしいよがり声ばかり。

「ほら大丈夫だろ? また濡れてきてるぞ」

「あ、あぁ……、あぁ、んっ、んぁ……やぁ……あぁ……」

彼に動かれたら耐えられないと思ったのに、欲熱の塊を啜えこんだ体は、いつそう蜜を溢れさせたらしい。彼が突き入れるたび、ぐちゅり、ぐちゅ、ぐちゅん、と粘りを帯びた水音を響かせる。「くっ、ぬるぬるなのに締めつけてくる」

気持ちが良いのか彼は悦に入った表情を浮かべ、わたしの中でさらに律動を刻み始めた。

「あ、あぁ……、はぁ……あぁ、ん、ん、あぁ……」

ずぶりと押しこんだかと思うと腰を引き、膣口の浅いところを昂りの尖端で撫で擦る。しばらく

そんな抜き差しを繰り返していた。

わたしは、何か探るようなその動きに揺さぶられながら、快感をやり過ごす。

「この辺りだったかな……」

そう言っ、彼が慎重に腰を揺すった。昂りを突き入れる角度が変わって、尖端がわたしの内壁を擦る。

その瞬間、自分でも思わぬほどの大声が出た。

「え……、あぁ!? ……あぁあっ、やぁ、あ、あぁ、あぁあ——っ!!」

「当たり前か? その感じだと。指よりこっちのほうがイイらしいな」

そこが先ほど指で擦られた箇所だと教えられた。

「あぁんっ、んぁ——」

つんと突くように腰を使われ、わたしはまた一段と高い声を上げる。

「気持ちいいか? そんなに腰を揺らして」

「んんっ……、あ、あぁ……、はぁ、あ……はぁっ……」

喘ぎながら舌がもつれてまともに喋れず、上がるのは嬌声ばかりだ。腰を揺らしていると吉瀬さんは言うが、自分には動かしているという意識がない。

ただ擦られるたびに甘い疼痛が広がり、このままではおかしくなると思った。

これはいったい何?

やっぱりここの、女を感じるイイところなの?

これまで膾中であまり感じたことがなかったわたしが、初めて覚える感覚だ。困惑したわたしは、縋るように彼を見上げる。

「色っぽい顔するなよ。お前がもっとほしくなるだろ」

もっとほしいって——？ 色っぽいなんて言われても困るのだけど……

どこかうっとりしたように掠れた声で言った吉瀬さんは、ニヤリと笑んで見せた。

そんな悪ぶった表情が、やんちゃな男の子のようだ。

「だったら……、奪って……」

何かが心の奥底に触れ、わたしは自分でも予想だにできなかったことを口にしていった。言ってから、自分の大胆さに驚いて身震いする。

「へえ——」

彼の眼差しが変わったように感じた。わたしの腰を抱えなおし、そろりと中のものを引いていく。

「あっ……」

わたしは咄嗟に追い縋ろうとしてしまう。

「抜きやしないから安心しろ。——望みどおり、今から奪ってやる」

宣言すると、彼はぬちゃりと音をさせながら奥まで押しこんだ。

そのときの表情が、今日一番悪そうなもので、わたしはぐくりと喉を鳴らす。

彼の動きは徐々に速さと執拗さを増し、大きくうねる。肉の熱棒でがつんがつんとわたしの中を、奥を手前を、左右も縦横も、届くところはすべてかき回して暴れた。

「や、あ、ああ……、あっ、あ、あ……」

「くうっ、たまらないな」

彼は感嘆めいた呻き声を漏らすと、最奥の肉壁を突き破らんばかりの勢いでさらに激しく打ちつける。

わたしは、喉から迸る嬌声を止められず、揺さぶられるまま声を上げ続けた。熱く滾る情欲の昂りに攻められ、翻弄されていく。

「あっ！ あっ、あっ、ああ——っ!!」

そしてついには、解き放たれたように真っ白い世界に包まれた——

わたしの勤め先である〈江香堂〉の本社ビルは、商業施設街の端にある。一階に店舗と喫茶、二階が物流部と倉庫。三階は、新製品開発のための器材を揃えた調理室と製造企画部。四階が営業部で、五階には総務部と役員室があった。工場は本社とはまた別のところにある。

わたしは部内朝礼のあと、焦る気持ちを抑えつつ四階フロアの隅にあるコピー機に向かった。これから始まる営業会議の資料のコピーを頼まれていたことを、すっかり失念していたのだ。

「何やってんだろ、わたし」

吸いこんだ息をそのまま吐き出すと、項垂れる。

わたしはこの一週間、かつてない悔恨に苛まれていた。理由はもちろんあれだ。会ったばかりの男と関係を持つてしまったこと。自分がこんなにも軽い女だったとは思わなかった。

そりゃ、あの男の見目は良かった。話し方も仕事もスマートで、じっと見詰められたらもうどきどきそわそわ、ときめかない女子はいないっていうくらいイケメンだ。

だからって、ほいほいついて行っちゃうって、どうなのだ。男がそういう目的だったのはわかっていたじゃないか。あのときはアルコールを飲んでわたし、ちよつと心神喪失中で冷静な判断ができなかったとか、気が昂ぶっていたとか言い訳できるものならしたい。

その上、プライベートの失敗を仕事にまで影響させてしまうのは、いかがなものだろう。

あれ以来、ゴミ箱に躓いて周囲にゴミをばら撒いたり、通勤定期を忘れたり、ミスを連発しているのがなんとも情けない。

「はあ……」

わたしは、トレイに排出される用紙を見ながら、もう何度目なのかわからない溜め息をつく。

どんなに嘆いても、事實は消えないし、すべて自分が招いたことだとわかつている。

もう忘れよう、考えるんじゃないと強く思えば思うほど、彼のことを思い出してしまふし、あの夜経験したことをなぞってしまうのだ。

耳に心地よく響く彼の声。庇うように背中に手を回されたときの温もり。触れた唇の柔らかさと舌を舐めとられて吸われる息の苦しさ。彼に胸の膨らみを触れられ、尖端の突起をすり潰さんばかりに捏ねられて。それから、わたしの中に……

ちよつと思ひ出しただけで、どきどきと鼓動が速くなってしまう。

だって、初めてだったのだ。セックスであんなに我を忘れるほど感じてしまったのは。挙句の果てには、彼の熱情に翻弄され、もつとほしいと求めていた。

そんなわたしに應えてか、彼は体がバラバラになるほどの激しさで突き上げ揺さぶった。わたしはこれまで経験したことのない快感にさらに乱れて、それが女の悦びなのだと思ったのだ。

まったく、会ったばかりの男とそんなことになるなんて。体の関係は互いに想いを重ねてから、というわたしの倫理観が全否定ではないか。

それに、彼はわたしを好きになったようなことを話していたが、場の雰囲気になんか流されただけに違いない。

その証拠が、金だ。

事を終え、ふらつきながらもシャワーを浴びてわたしが部屋に戻ると、彼に金を突きつけられた。タクシー代にしろと言っていたが、何を意味する金なのか理解できないほどわたしは世間知らずではない。一夜限りの遊びの報酬だ。

そのときのシヨックは大きかった。なんだかんだと彼には好感を持ち、惹かれていたのだ。だから、金でどうにかできる女だと思われたのが悔しくて腹立たしくて、気づいたときには手でそれを払いのけ部屋を飛び出していた。

だけどあのお金を受け取っていたら、そういう一度限りの関係だったと割り切れたかも。こんなに引きずらずに済んだ気もする。

そう思う傍ら、胸の奥がちくんとしてしまう。なんなのだ、これは。

忘れてはいけないという戒め？ むやみに男に気を許してはいけないと……

「あー、古池さん、いたー」

「えっ？ あっ」

不意に後ろから二つ年上の先輩、及川さんに声をかけられ、わたしははたと我に返る。

壁の時計を見ると、会議開始まであと八分と迫っていた。慌てて止まっていたコピー機に次の原稿をセットすると、スタートボタンを押す。

ぼんやりしすぎだ。ただでさえぎりぎりなのに、こんなことで時間を取られてしまうなんて。これでは会議に間に合わないではないか。

「課長が呼んでるわ。すぐに来てくれて」

「でもわたし、まだコピーが終わってなくて。会議に必要なのに」

わたしはガーガーと排出される用紙を取り、既に終わっていた分に重ねていく。

「会議は午後に変更だつて」

及川さんが小さく肩を竦めた。その拍子に緩めのウエーブがかかった髪が、ふわりと揺れる。髪を一つに纏めているわたしとは違い、とても可愛らしい。

「午後に変更ですか？」

すぐには信じられない思いでわたしは訊き返した。

まさかコピーが遅いから時間変更を余儀なくされて……なんてことはないと思うが、珍しい。定例会議なので、ほとんどの営業が会議のあと商談に出かける予定を組んでいる。それなのに時間の変更をするなんて、よっぽど優先しなければならぬことが出てきたのだろうか。

「さっき会った製造企画部の同期が言っただけで、朝から上、すごいバタバタしてるんだつて」

「バタバタ？」

上と言うのは、五階の総務部だ。役員室の可能性もあるが、両者とも営業の会議には関係ない気がするのだけだ。